

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12366

研究課題名（和文）多角的なデータから明らかにするタガログ語の文末助詞の機能と音調

研究課題名（英文）Sentence-final particles in Tagalog: form, function, and prosody

研究代表者

長屋 尚典（Nagaya, Naonori）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授

研究者番号：20625727

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：文末助詞は文にさまざまな談話機能・語用論的效果を付与する重要な要素であり、言語類型論や理論言語学においても盛んに研究されている。しかし東南アジアを代表する言語の一つであるタガログ語においては文末助詞についての基礎研究が圧倒的に不足している。そこで、本研究計画はタガログ語の文末助詞の機能と音調について明らかにしようとした。大きな研究成果としては [a] タガログ語の文末助詞の概論 [b] e の機能と音調 [c] ano の機能と音調について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文末助詞は、どの言語であれ、言語による人間のコミュニケーションで重要な働きをする。日本語の「よ」「ね」「か」などのように、伝えようとする情報自体については何も新しい情報を加えないものの、その情報について話者がどの程度の確信を持っているのか、文脈の中でどのような意味を持つのかなどのニュアンスを加える。このプロジェクトでは東南アジアで1億人が話すタガログ語の文末助詞を概観するとともに、特に、e と ano について詳細な分析を行った。この研究成果によって世界の言語の文末助詞の共通点と相違点が明らかになるとともに、人類の言語の理解が深まった。この研究成果について日本言語学会論文賞などを受賞した。

研究成果の概要（英文）：Discourse particles are broadly understood as referring to invariable linguistic items that are used to express the speaker's epistemic attitude toward the propositional content of an utterance or to manipulate discourse coherence. East and Southeast Asian languages are well known for their rich inventory of discourse particles in this sense, and accordingly, there is a rich literature on this topic. Unfortunately, however, little is known about discourse particles in Tagalog and other Philippine languages, and much uncertainty still exists about the nature of discourse particles in these languages. This project aims to bridge this gap by examining discourse particles used in actual social interaction by Tagalog speakers. To be more specific, by observing the actual usage of discourse particles in naturally occurring conversations, this project offers a general overview of discourse particles in Tagalog.

研究分野：言語学

キーワード：言語学 記述言語学 言語類型論 オーストロネシア語族 タガログ語 フィリピン諸語 文末助詞
談話標識

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

タガログ語 (Tagalog) は、フィリピン共和国マニラ首都圏付近で話されているオーストロネシア語族西マレー・ポリネシア語派に属する言語である。フィリピンの公用語としてはフィリピン語とも呼ばれ、話者人口 1 億人に迫るアジアの主要言語の一つであり、言語類型論・理論言語学の点で重要なフィリピン・タイプを代表する言語である。

本研究課題が研究対象とする文末助詞 (sentence-final particles) とはその名の通り、文末 (厳密には発話のターンの最後) に出現し、さまざまな談話機能・語用論的效果を付加する要素である。日本語でいえば「雨が降っていますよ」「あなたは田中さんですね」の「よ」や「ね」がそれに相当する。タガログ語には 6 つ (e、o、a、ha、ano、diba) 存在する。

2. 研究の目的

文末助詞は文にさまざまな談話機能・語用論的效果を付与する重要な要素であり、言語類型論や理論言語学においても盛んに研究されている。しかしながら、東南アジアを代表する言語の一つであるタガログ語においては文末助詞についての基礎研究が圧倒的に不足している。そこで、本研究計画は、タガログ語の 6 つの文末助詞 (e、o、a、ha、ano、diba) を取り上げ、これらが (a) どのような機能を持ち、(b) どのような音調と結びつき、(c) その機能と音調はどのような相互作用を達成しているかを明らかにする。

3. 研究の方法

2 で述べた研究目的を達成するために、本研究計画では、(i) エリシテーションタスクによる実験、(ii) 音調パターンの音声分析、(iii) 聞き取り調査、ならびに (iv) 会話コーパスの分析という方法で研究を推進することを計画していた。

2018 年度、2019 年度については順調に研究を推進し、基礎的研究に費やした。フィールドワークによってデータを集中的に収集するとともに、すでに収集したデータを分析し論文化を試みた。さらに、会話コーパスについては引き続き撮影・録音・文字起こしを行い、より包括的なデータ収集に努めた。

しかし、2019 年度末からの新型コロナウイルス感染症のためフィールドワークが計画通り行えなかったため、(i) による研究は実施が困難になった。このため、以下では (ii) (iii) (iv) の研究方法による研究成果をまとめて報告する。

4. 研究成果

本研究の研究成果には大きく (あ) タガログ語の文末助詞の概観、(い) 自然談話コーパスにおける e の機能と音調、(う) 自然談話コーパスにおける ano の機能と音調、さらに (え) 文末助詞と深く関連する諸現象の分析がある。これらに加えて、(お) 当研究課題と大きく関連する国際学会や講演会も行いアウトリーチ活動も行った。

特筆すべき点としては、2019 年に発表した *Thethetic/categorical distinction in Tagalog revisited: A contrastive perspective* について日本言語学会論文賞を 2020 年 11 月に受賞したことがある。さらには、本研究の成果を含むフィリピン諸語研究への貢献が評価され Br Andrew Gonzalez F.S.C. Distinguished Professorial Chair in Linguistics and Language Education を 2021 年 3 月に受賞した。

なお、本来 2018 年度から 2021 年度までの 4 年計画であったが、研究計画最終年度前年度応募を行い、大規模ウェブコーパスによる研究を開始したため、ここに記載しているのは 2020 年度までの研究成果である。

(あ) タガログ語の文末助詞の概観

本研究課題ではタガログ語の文末助詞の概観を大きな目標としているため、それらを概観する

論文を執筆した。Nagaya (to appear) では、エリシテーションやフィールドワークにおける録音に基づき、タガログ語の文末助詞について概観し、さらには文頭や文中に出現する助詞とも比較し、全体像を提示した。特に文末助詞 e について自然談話コーパスや音調パターンも分析することで多角的なデータから分析を行った。上記のとおりタガログ語の文末助詞については十分な記述研究がない状態であるが、この論文によってこの言語の文末助詞の全体像がはじめて明らかになったといえる。

Nagaya, Naonori. To appear. Discourse particles in Tagalog: The case of *e*. Elin McCready and Hiroki Nomoto (eds.) *Discourse Particles in Asian Languages*. London: Routledge. (最終版を編者に提出済み)

(い) 自然談話コーパスにおける e の機能と音調

本研究課題では (あ) のようなタガログ語の文末助詞の全体像を明らかにするだけでなく、特に重要な文末助詞 e について詳細な分析を行い長屋 (2020) として発表した。この論文では、タガログ語の文末助詞 e をとりあげ、自然会話コーパスに出現する実例を分析することで、記述的および理論的貢献を目指した。記述的な面では、e が Right Periphery に現れ、下降調で長めに発音され、頻度が極めて高いという観察をした上で、実例に基づき e は話者がスタンスを正当化するときに使われるというスキーマを提示した。1 ページにも満たない記述しかなかった e について、実際の会話データに基づく実証的分析を提示することができたのである。理論的には、会話コーパスの重要性、コミュニケーションの場における言語研究の重要性、そして言語類型論の視野の重要性を指摘した。

長屋尚典. 2020. 会話のなかのタガログ語文末助詞 e. 中山俊秀・大谷直輝 (編) 『認知言語学と談話機能言語学の有機的接点: 用法基盤モデルに基づく新展開』 267-290. 東京: ひつじ書房.

(う) 自然談話コーパスにおける ano の機能と音調

本研究課題では e のみならず、ano についても詳細に分析をおこない Nagaya (2022) として発表した。本論文ではタガログ語の疑問詞 ano ‘what’ の疑問以外の用法に注目した。タガログ語話者の会話データベースを構築し、言語使用において疑問詞は疑問のために使われるよりも、確認の文末助詞やプレースホルダーなど、疑問以外の目的に創発的に使われることが多いことを発見した。たとえば、文末助詞としてあまり自信のない発言について聞き手に確認を求める際に使用されたり、認知的に思い出せない単語やタブーのかわりに使用されたりする (日本語の「あれ」に相当)。このことを通して、人間が言語によってコミュニケーションを達成する際の創発性の解明に貢献した。

この論文は発表こそ 2022 年 2 月であるものの、本研究課題において、カリフォルニア大学ロサンゼルス校 Hongyin Tao 教授や香港中文大学深圳校 Foong Ha Yap らと共同で行ったプロジェクトの成果である。

Nagaya, Naonori. 2022. Beyond questions: Non-interrogative uses of ano ‘what’ in Tagalog. *Journal of Pragmatics* 190, 91–109. <https://doi.org/10.1016/j.pragma.2022.01.007>

(え) 文末助詞と深く関連する諸現象の分析

文末助詞は人間言語によるコミュニケーションに深く根ざす現象であるために、文末助詞以外の現象を同時に分析する必要があった。この観点から、タガログ語に関連するさまざまな現象について分析を行い以下のような成果をあげることができた。

特に、Nagaya (2019) は、文末助詞の研究において重要となる情報構造について、日本語の「は・が」との比較の観点から論文を執筆し、『言語研究』において発表したものである。長らく日本語の「は」はタガログ語の文法要素 ang に相応すると考えられていた。しかし、本論文では、これまで想定されていた日本語の「は」とタガログ語の ang の類似は表層的なものであり、両者は本質的には異なることをさまざまなテストを用いて証明した。重要な文法要素の理解を深めるのみならず、言語類型論の通説が誤りであることを明らかにした。

さらに、Hwang, Nagaya & Villegas (2019)、Nagaya & Hwang (2018) はタガログ語の音調に関する基礎的研究である。このような音調に関する基礎的研究はその後、文末助詞の音調を研究する際に大いに役立った。このような音調をふまえたタガログ語の研究は未だ少なく、本研究課

題はその意味でも重要である。

この他、Nagaya & Uchihara (2021) では言葉遊びと呼ばれる現象からタガログ語の音韻論について探求したものであり、また、松本ほか (2021) ではタガログ語の移動表現を、Nagaya (2020) ではタガログ語の重複・反復表現を理論的に考察した。

Nagaya, Naonori & Hiroto Uchihara. 2021. Ludlings and phonology in Tagalog. *Asian and African Languages and Linguistics* 15. 9–20. <https://doi.org/10.15026/99893>

松本曜, 鈴木唯, 高橋舜, 谷川みずき, 長屋尚典, 吉成祐子. 2021. 「複数局面を含む移動事象表現と言語類型論: 日本語と他言語の比較」窪園晴夫・野田尚史・プラシャント パルデシ・松本曜 (編) 『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』178–205. 東京: 開拓社.

Nagaya, Naonori. 2020. Reduplication and repetition from a constructionist perspective. *Belgian Journal of Linguistics* 34. 259–272. <https://doi.org/10.1075/bjl.00051.nag>

Nagaya, Naonori. 2019. Thethetic/categorical distinction in Tagalog revisited: A contrastive perspective. *Gengo Kenkyu* 156: 47–66. https://doi.org/10.11435/gengo.156.0_47

Hwang, Hyun Kyung, Naonori Nagaya & Julián Villegas. 2019. Cue weighting in the perception of Tagalog stress. *The Journal of the Acoustical Society of America* 146(4). 3052. <https://doi.org/10.1121/1.5137583>

Nagaya, Naonori & Hyun Kyung Hwang. 2018. Focus and prosody in Tagalog. Sonja Riesberg, Asako Shiohara & Atsuko Utsumi (eds.), *Perspectives on information structure in Austronesian languages*, 375–388. Berlin: Language Science Press. <https://doi.org/10.5281/zenodo.1402557>

(お) 国際学会・アウトリーチ活動

本研究課題の成果を広く世界に発信し、また、本研究課題に関連した研究交流を促進するために、国際学会やアウトリーチ活動も積極的に行った。

29th Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society (SEALS 29) を主催者として開催し、本研究課題と関連する研究を行っている研究者と研究交流を行った。

UTokyo Linguistics Colloquium を開催した。Dr. Foong Ha YAP 氏 (Chinese University of Hong Kong, Shenzhen)、Shun Nakamoto 氏 (Universidad Nacional Autónoma de México)、Dr. Hiroto Uchihara 氏 (Universidad Nacional Autónoma de México)、Ryo Umeda 氏 (University of Helsinki)、中川奈津子氏 (国立国語研究所)、倉部慶太氏 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)、高橋康德氏 (神戸大学 大学教育推進機構) に講演していただき、本研究課題に関する研究交流を行い、アイデアを得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Nagaya, Naonori & Hiroto Uchihara	4. 巻 15
2. 論文標題 Ludlings and phonology in Tagalog	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Asian and African Languages and Linguistics	6. 最初と最後の頁 9-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/99893	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 Nagaya Naonori	4. 巻 34
2. 論文標題 Reduplication and repetition from a constructionist perspective	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Belgian Journal of Linguistics	6. 最初と最後の頁 259-272
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/bjl.00051.nag	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Naonori Nagaya	4. 巻 156
2. 論文標題 The thetic/categorical distinction in Tagalog revisited: A contrastive perspective	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Gengo Kenkyu	6. 最初と最後の頁 47～66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11435/gengo.156.0_47	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Hwang Hyun Kyung, Nagaya Naonori, Villegas Julian	4. 巻 146
2. 論文標題 Cue weighting in the perception of Tagalog stress	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Journal of the Acoustical Society of America	6. 最初と最後の頁 3052～3052
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1121/1.5137583	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Nagaya Naonori	4. 巻 190
2. 論文標題 Beyond questions: Non-interrogative uses of ano 'what' in Tagalog	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Pragmatics	6. 最初と最後の頁 91 ~ 109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.pragma.2022.01.007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 12件)

1. 発表者名 Naonori Nagaya
2. 発表標題 The middle voice in symmetrical voice languages: Toward a diachronic typology
3. 学会等名 53rd Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉田樹生, 島健太, 鈴木唯, 谷川みずき, 林真衣, 細羽洸希, 諸隈夕子, 長屋尚典
2. 発表標題 日本語と世界の言語における単複と頻度の関係: 言語類型論的コーパス研究
3. 学会等名 Prosody & Grammar 5
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Naonori Nagaya
2. 発表標題 Usage-based Philippine linguistics
3. 学会等名 Br. Andrew Gonzalez FSC Distinguished Professorial Lecture in Linguistics and Language Education (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Naonori Nagaya
2. 発表標題 Teaching the Filipino Language in Japan
3. 学会等名 INTERSECTIONS: International Conference on the Shared Histories and Cultural Heritage of Japan and the Philippines (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hwang, Hyun Kyung, Julian Villegas, Naonori Nagaya
2. 発表標題 Cue weighting in the perception of Tagalog stress
3. 学会等名 178th Meeting of the Acoustical Society of America (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長屋尚典
2. 発表標題 構文形態論の新地平: 複合語・繰り返し・「語」の境界
3. 学会等名 日本語学会 第159回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Naonori Nagaya
2. 発表標題 Reciprocity in Tagalog dyad constructions
3. 学会等名 Workshop on Cross-Linguistic Semantics of Reciprocals (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Matsumoto, Yo, Anna Bordilovskaya, Kiyoko Eguchi, Kazuhiro Kawachi, Miho Mano, Takahiro Morita, Naonori Nagaya, Kiyoko Takahashi, and Yuko Yoshinari
2. 発表標題 A crosslinguistic experimental study of fourteen different Paths: Toward a scale-based typology of motion-event descriptions
3. 学会等名 13th conference of the Association for Linguistic Typology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Naonori Nagaya
2. 発表標題 Relativization in Tagalog conversation: A typological perspective
3. 学会等名 13th conference of the Association for Linguistic Typology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Naonori Nagaya
2. 発表標題 Sentence-final particle e in Tagalog
3. 学会等名 Southeast Asian Linguistics Society 28 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 長屋尚典
2. 発表標題 コメンテーター. 80周年記念シンポジウム「日本のヴォイス研究の80年：成果と展望」
3. 学会等名 日本言語学会第156回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 長屋 尚典 & フロリンダ・バルマヒル
2. 発表標題 フィリピン語/タガログ語とCEFR: 言語社会における現状と課題
3. 学会等名 「CEFR準拠の外国語教育資源整備用ワークベンチの開発と評価」科研費研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Naonori Nagaya
2. 発表標題 Nominalization in Tagalog conversation
3. 学会等名 13th Philippine Linguistics Congress (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 長屋尚典
2. 発表標題 タガログ語移動表現の経路表示
3. 学会等名 日本言語学会第157回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 長屋尚典
2. 発表標題 タガログ語のリンカーと名詞修飾
3. 学会等名 国立国語研究所・名詞修飾表現プロジェクト共同研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Naonori Nagaya
2. 発表標題 Motion event descriptions in Tagalog
3. 学会等名 Motion Event Descriptions across Languages (MEDAL) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長屋尚典, 天野友亜, 榎本恵実, 大久保圭夏, 鈴木唯, 高橋梓, 高橋舜, 田中克典, 谷川みずき, 福原 百那, 山田あかり
2. 発表標題 経路の種類と経路表示 東京外国語大学における通言語的実験の成果
3. 学会等名 Prosody & Grammar Festa 3
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Naonori Nagaya
2. 発表標題 Sentence-final particle e in Tagalog
3. 学会等名 96 years of UP Linguistics, Department of Linguistics, University of the Philippines Diliman (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 中山俊秀、大谷直輝 (分担: 長屋尚典)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 408 (分担: 267-290)
3. 書名 認知言語学と談話機能言語学の有機的接点 (分担: 第11章 会話のなかのタガログ語文末助詞 e)	

1. 著者名 窪園晴夫、野田 尚史、ブラシャント パルデシ、松本 曜 (分担: 松本曜, 鈴木唯, 高橋舜, 谷川みずき, 長屋尚典, 吉成祐子)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 328 (分担: 178-205)
3. 書名 日本語研究と言語理論から見た言語類型論 (分担: 複数局面を含む移動事象表現と言語類型論: 日本語と他言語の比較)	

1. 著者名 森雄一, 西村義樹, 長谷川明香 (分担: 長屋尚典)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 326 (23~43)
3. 書名 認知言語学を拓く (分担: 「第2章 意図と知識 タガログ語のma-動詞の分析」)	

1. 著者名 窪園晴夫 (分担: 長屋尚典)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 232 (182~191)
3. 書名 よくわかる言語学 (分担: 「言語類型論」)	

1. 著者名 Sonja Riesberg, Asako Shiohara & Atsuko Utsumi (担当 Naonori Nagaya & Hyun Kyung Hwang)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Language Science Press	5. 総ページ数 438 (担当: 375-388)
3. 書名 Perspectives on information structure in Austronesian languages (担当: Focus and prosody in Tagalog)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究課題の成果を含むフィリピン諸語研究への貢献が評価され Br Andrew Gonzalez F.S.C. Distinguished Professorial Chair in Linguistics and Language Education を2021年3月に受賞した。2019年に発表した The thetic/categorical distinction in Tagalog revisited: A contrastive perspective について日本言語学会論文賞を2020年11月に受賞した。

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 UTokyo Linguistics Colloquium	開催年 2019年～2021年
国際研究集会 29th Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society (SEALS 29)	開催年 2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
中国	Chinese University of Hong Kong		
米国	University of California, Los Angeles		